



ロサンゼルス市内にあるJUSC Medical Center（南カリフォルニア大学病院）の受付で、「VISITOR（訪問客）」と印刷されたオレンジ色のワッペンを手渡されるまでに、私たちは何回ガードマンのチェックを受けたことだらう。「何のためにここへ来たの

く通過することのできた入り口では、なんとX線による荷物検査まで行われた。

現地の交通事故捜査について話を聞くことになつてた。アメリカでは、他殺、変死、自殺、事故死（交通事故を含む）など、医師が立ち会えなかつた人の「死」の現場に、必ずコロナ死亡事故や重傷事故で被害者が供述できないとき、その事故はときとして「死人に口なし」的な処理をされてしまうことがある。アメリカ・口サンゼルスではそうした事態を防ぎ、真実を明らかにするため、「口ナ一（検視官）と呼ばれるエキスペートが、警察官より先に現場を徹底的に検証している。交通事故におけるコロナの役割とはどのようなものなのか、元検視局長のトーマス野口氏に話を聞いた。

責任者である検視局長(Chief Medical Examiner-Coroner)に選出されたのは、一九六七年のことである。検視局長は死因がはつきりしない場合の調査会や検視裁判を開く権限を持っており、さらに警察官や高級官僚、政治家に対する逮捕権も持っているという。日本には同じポストがないので比較しづらいが、社会的影響力はかなり大きいようだ。

野口氏は「トクター」形
事」とも呼ばれるコロナーの
役割について語り始めた。
「殺人や死」事故が発生する
と、私たちは必ず現場に駆け
つけます。現場には警察官が
先に到着しますが、彼らは私
たちコロナーが来るまで待た
なければなりません。『ウエ
グ・フォー・ザ・コロナーズ。
』。これはテレビドラマな
に、コロナーが来るまでは、現
場にもいっさい触れてはいい
ことです。確かに、日本
たい警察官がやってしまいま
らは事故現場のことは経験上、
ると思うんですが、医学的な

「ありません。そういう所だから御
妙なケースについても遺体を動かして
しまつてはいるのが現状ではないかと思
います。

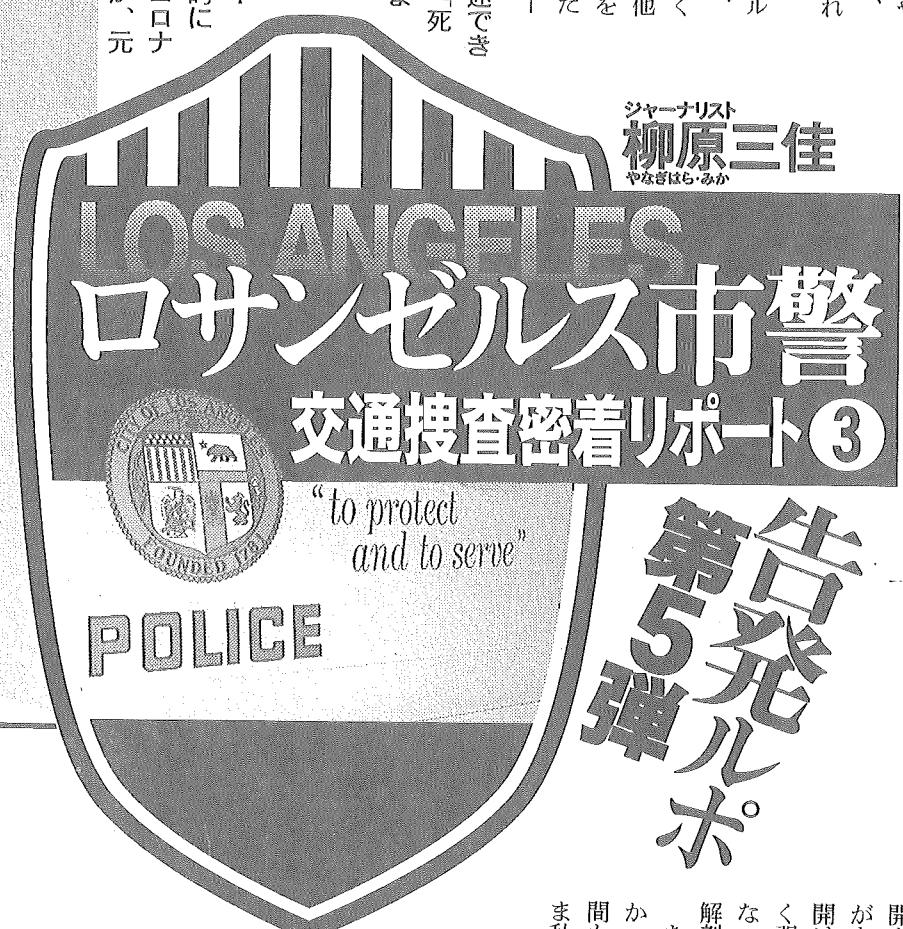
もちろん、日本とアメリカでは法律
が違いますし、コロナの持つ法的な
権力は日本の監察医とは全く異なるも
のですから、直接比較はできません
が、コロナのオフィスをあえて日本
の東京都にたとえると、東大の法医学

元検視局長 トマス野口が語る 「検視官が来るまで 現場にさわるな！」

警察室(舊警視庁の捜査一課監察課)をして、区役所の遺族係をひとつにしたようなものといえるでしょう。アメリカの警察はコロナーのことを、「死体を扱う特別警察」と心得ています。『コロナー』という言葉は、日本ではあまり耳慣れないが、この制度はもともと、イギリスからアメリカに伝わったものである。野口氏の共著『検死検査』によると、世界の検視制度は大きく二つに分けられるという。ひとつは、死因に殺人などの疑いがある場合、警察の依頼のもとに検視する司法解剖で、日本の検視制度がこれにあたる。そしてもうひとつは、英國法をもとにしたコロナー制度である。氏は、著書の中で次のように記している。

「十二世紀はじめ、イギリスを占領していたノルマン人は、イギリス人に對して、不動産から家畜、家財に至るまで税をかけた。そして、自殺者を出した家や事故を起こした家は、全財産を没収されるという厳しさだった。たと

トマス・T・野口
(本名: 野口恒富) 1927年、福岡県生まれ。医学博士。日本医科大学で医学を、中央大学で法医学を学ぶ。52年に渡米。61年、ロサンゼルス検視局に招聘され、67年から82年までロサンゼルスの検視局長を務める。マリリン・モンロー、ロバート・ケネディ、ナタリー・ウッドなど数々の著名人の検視検査を行った。現在、南カリフォルニア大学法病理学教授。著書に『死者たちのメッセージ』『検死検査』(共著)などがある。



野口氏が、コロナーの最高
の仕事を使命と思ってやつてき
たたかれました。でも私は、こ
の仕事を使命と思ってやつてき
ました……」

のようなステンレスの台がいくつも置かれている。私はそのまま横を通りながら、一瞬「これは何だろう……」と思つたが、台の上に脂のようなものが付着しているのを見て、すぐにそれが死体を運ぶストレッチャーであることに気がついた。

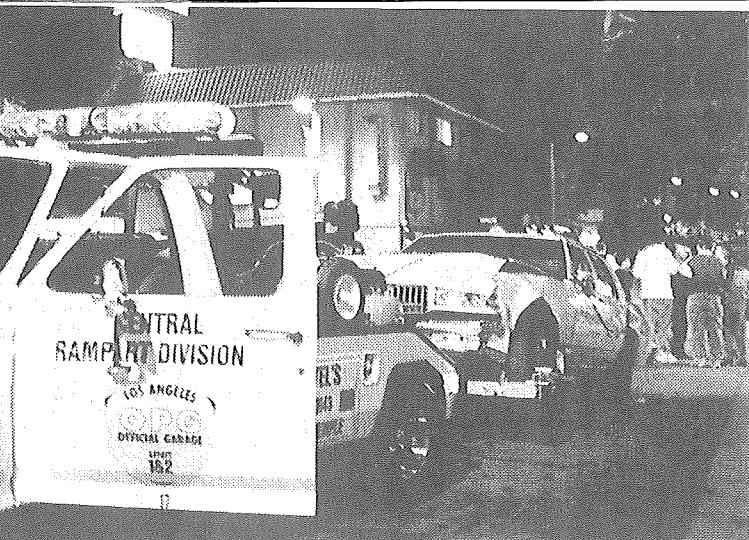
突然、廊下に面したドアのひとつが開き、中から手術衣に身を包んだ医師があわただしく出てきた。そのとき、開け放されたドアの向こうをなにげなく視いた私は、一瞬、体が棒のようになってしまった。そこには、解剖中の若い男性の遺体だった。

あまりの驚きにしばらくは声も出なかつたが、頂点に達していた緊張は、間もなく解きほぐされた。仕事着のまま私たちの前に現れたトーマス野口氏は、白髪のとても穏やかな人だった。七十一歳とは思えない少年のような目が印象的だつたが、二十五歳で単身渡米し、医学界の第一人者としての地位を築くまでには、白人社会からの強烈なバッシングも何度か経験したという。

(検視官)と呼ばれる専門の検査官が駆けつけ、医学的見地から死因を徹底的に究明しているという。

なかつたりしたケースに、数多く立ち会つてきた。それだけに、アメリカのこのシステムについて、ぜひ調べてみたいと思っていたのだ。

125 運河朝日 '99. 1.22



えば、ノルマン人がイギリス人を殺しても一切おとがめなしだったが、イギリス人がノルマン人を殺した場合は、加害者本人だけでなく、村全体にも問題となる。そこで、死因を調査する専門の役職が生まれた。一九四年に法制化された『コロナー』である。つまり、コロナーのルーツは八百年前にさかのぼるわけだが、その使命も

せられた。英語の『殺人』(murder)の語源である。こうなると死因が大きな問題となる。そこで、死因を調査する専門の役職が生まれた。一九四年に法制化された『コロナー』である。